第Ⅰ章　研究の概要

1　研究主題及び副主題

求められる資質・能力を育む学習指導の在り方

～子どもを主語にした主体的・対話的で深い学びの実現を目指して～

⑴　主題設定の理由

人工知能（AI）、ビッグデータ、Internet of Things（IoT）、ロボティクス等の先端技術が高度化してあらゆる産業や社会生活に取り入れられたSociety5.0時代が到来しつつある。社会の変化は加速度を増し、複雑で予測困難となってきており、そうした変化が、どのような職業や人生を選択するかに関わらず、全ての児童生徒の生き方に影響するものとなりつつある。社会の変化にいかに対応していくかという観点に立つと、今後の社会を生き抜くことが難しい時代になると考えられる。

また、新型コロナウィルス感染症が令和５年５月に５類感染症に位置付けられたことに伴い通常の生活を取り戻したが、学校においても長期にわたり甚大な影響を及ぼすものとなった。そうした中で、社会全体のデジタル化が急速に推進され、ICT 環境を最大限に活用して学びの保障を進めること、また学校教育の本質的な意義を踏まえ、この事態に対応するためのカリキュラム・マネジメントを展開することが全国の学校に求められた。

このような状況を踏まえ、学習指導要領の着実な実施、指導と評価の一体化を通して目指す児童生徒の資質・能力について、次のように捉えた。

> 一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすること

学習指導要領では、①「何ができるようになるか」（育成を目指す資質・能力），②「何を学ぶか」（教科等を学ぶ意義と，教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成），③「どのように学ぶか」（各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実），④「児童生徒一人一人の発達をどのように支援するか」（児童生徒の発達を踏まえた指導），⑤「何が身に付いたか」（学習評価の充実），⑥「実施するために何が必要か」（学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策）の６点を基に、学校教育の改善・充実を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現を目指すことが求められている。

これらを踏まえ、上川教育研修センターの第 19 次研究では、「求められる資質・能力を育む学習指導の在り方～指導と評価の一体化を目指す学習評価」と主題及び副主題を設定し、児童生徒が身に付けるべき資質・能力が明確化された目標を基にした学習指導と、形成的な評価に重点を置いた「指導と評価の一体化」を図ることで、児童生徒の学習改善と、教師の指導改善につなげることを目指した。２年次では、「個別最適な学び、協働的な学び」に焦点を当て、これらを一体的に充実させることで、児童生徒の資質・能力の確実な育成を目指した。

第 20 次研究では、現行の学習指導要領から次期指導要領への改定が近づく今だからこそ、現行の学習指導要領で重視されてきた「主体的・対話的で深い学び」の視点に再度立ち返り、教師の授業改善と児童生徒の学習改善を実現し、児童生徒の資質・能力の育成を目指すこととし、次のような研究を進めることにした。

⑵ 研究主題のおさえ

① 研究主題～求められる資質・能力を育む学習指導の在り方

「求められる資質・能力」とは、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となるために必要となる力である。「何ができるようになるか」を明確化し、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の３つの柱で再整理されている。

これらを育成する上で必要な教育の在り方を具体化するのが、各学校において教育の内容等を組織的かつ計画的に組み立てた教育課程である。

「学習指導の在り方」においては、「どのように学ぶか」という点で、「主体的・対話的で深い学び」や「カリキュラム・マネジメント」の視点からの授業改善がその中核的な役割を担い、指導と評価の一体化を図ることが重要となる。

また、令和元年度からのGIGAスクール構想により、新たな学校の「スタンダード」として、小学校段階から学校における高速大容量のネットワーク環境の整備が推進された。これを受けて、ICTをツールとして効果的に活用し、教育の質の向上につなげ、教師・児童生徒の力を最大限に引き出すことが求められる。

② 副主題～子どもを主語にした主体的・対話的で深い学びの実現を目指して

「子どもを主語にした」とは、教師目線の「何を教えるか」「どのように教えるか」という視点ではなく、児童生徒が「何を学ぶか」「どのように学ぶか」という視点で、授業づくりを行うことである。児童生徒が自らの興味・関心に応じて、「何を学ぶか」「どのように学ぶか」を選択したり、自己決定したりすることができる場面を設定することが考えられる。また、教師が目標や学習過程、学習内容を一方的に設定するのではなく、教師と児童生徒とが共有しながら考えたり設定したりすることで、児童生徒が主体的に学習に取り組むことができる。

「主体的・対話的で深い学びの実現」は、「求められる資質・能力」を育むための授業改善の視点である。教科等の特質を踏まえ、具体的な学習内容や児童生徒の状況等に応じて、３つの視点の具体的な内容を手掛かりに、質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにすることが求められている。「学習者による学びの改善の視点」と「授業者による授業の改善の視点」を往還することが、「主体的・対話的で深い学び」の実現につながると考えられる。

２ 求める児童生徒像

「知識及び技能」を習得し、「思考力、判断力、表現力等」を高め、「学びに向かう力、人間性等」を涵養し、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら深い学びに向かっていく児童生徒。

３ 研究の仮説

「主体的・対話的で深い学び」の視点で授業改善を図ることで、児童生徒の学習や教師による指導の改善等につなげ、組織的かつ計画的に教育活動の質が向上し、児童生徒に求められる資質・能力が育成されるであろう。

４　研究内容

子どもを主語にした主体的・対話的で深い学びの実現を目指すために、次の内容について研究する。

研究内容１　～児童生徒の思考に沿った単元デザインの工夫～

⑴　課題設定、見通し

- 児童生徒の実生活や実社会と繋がりのある課題の設定
- 学習過程のイメージ、目指すべき姿のイメージの共有

⑵　自己決定、自己選択

- 「何を学ぶか」「どのように学ぶか」を児童生徒が自ら決定する場面の設定及び工夫

⑶　単元レベルでの振り返り

- 学習内容の確認や既習事項との関わり、自己変容の把握等のための振り返りの方法や場面、タイミング等の吟味

研究内容２　～児童生徒の深い学びを充実させる本時の展開の工夫～

⑴　発問

- 児童生徒が「見方・考え方」を働かせ、深い学びへとつながる働き掛けの工夫

⑵　必要感のある学び合い

- 「交流をしたい」「しなければ課題を解決できない」と感じられる展開の工夫

⑶　本時レベルでの振り返り

- 学んだことをこれまでの学びと結び付けたり、新たな考えや意見を生み出したりするための振り返りの方法や場面、タイミング等の吟味

５　研究の進め方

- 教科指導を主体として研究を進める。
- 文献や実践資料に基づく理論研究を週１回の定例研究室会議及び夏季、冬季の集中研究室会議において進める。
- 各年次とも、上川教育研修センターの研究員及び、研究協力校の授業実践を基にして理論を検証し、研究紀要にまとめる。
- 研究の結果については、授業研究、研究協議等の授業実践で明らかにされた成果と課題を基に、研究紀要にまとめる。

６　研究計画の概要

令和６年度から令和７年度にわたる２か年において、単元デザインの工夫と、本時の展開の工夫を研究内容の柱として、研究を推進する。

１年次　令和６年度　授業実践（所員２名、研究協力校２校）

研究員の授業実践

旭川市立北門中学校　　理　科（「生命の連続性」）
研究員　荒木　健地

旭川市立朝日小学校　　社会科（「郷土を拓く」）
研究員　河野　　翼

協力校の授業実践

旭川市立東五条小学校　体育科（「マットを使った運動あそび」）
授業者　塩見　友哉　　研究担当　髙原　隼希

旭川市立東鷹栖中学校　理　科（「身のまわりの現象」）
授業者　森　　憲児　　研究担当　畑　　啓介

7　研究の全体構造

研　究　主　題

求められる資質・能力を育む学習指導の在り方

～子どもを主語にした主体的・対話的で深い学びの実現を目指して～

求める児童生徒像

「知識及び技能」を習得し、「思考力、判断力、表現力等」を高め、「学びに向かう力、人間性等」を涵養し、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら深い学びに向かっていく児童生徒。

研 究 の 仮 説

「主体的・対話的で深い学び」の視点で授業改善を図ることで、児童生徒の学習や教師による指導の改善等につなげ、組織的かつ計画的に教育活動の質が向上し、児童生徒に求められる資質・能力が育成されるであろう。

研　究　内　容

子どもを主語にした主体的・対話的で深い学びの実現を目指して

研究内容１　～児童生徒の思考に沿った単元デザインの工夫～

⑴　**課題設定、見通し**
- 児童生徒の実生活や実社会と繋がりのある課題の設定
- 学習過程のイメージ、目指すべき姿のイメージの共有

⑵　**自己決定、自己選択**
- 「何を学ぶか」「どのように学ぶか」を児童生徒が自ら決定する場面の設定及び工夫

⑶　**単元レベルでの振り返り**
- 学習内容の確認や既習事項との関わり、自己変容の把握等のための振り返りの方法や場面、タイミング等の吟味

研究内容２　～児童生徒の深い学びを充実させる本時の展開の工夫～

⑴　**発問**
- 児童生徒が「見方・考え方」を働かせ、深い学びへとつながる働き掛けの工夫

⑵　**必要感のある学び合い**
- 「交流をしたい」「しなければ課題を解決できない」と感じられる展開の工夫

⑶　**本時レベルでの振り返り**
- 学んだことをこれまでの学びと結び付けたり、新たな考えや意見を生み出したりするための振り返りの方法や場面、タイミング等の吟味

ICT の効果的な活用

- 多様で大量の情報の収集、整理・分析、まとめ・表現
- 児童生徒の思考の過程や結果の可視化
- 情報の双方向性による瞬時の情報共有